

DSM-5® ガイドブック 診断基準を使いこなすための指針

Black DW, Grant JE【原著】 高橋 三郎【監訳】 下田 和孝, 大曾根 彰【訳】

評者

明智 龍男 名古屋市立大学大学院教授・精神・認知・行動医学

精神現象は可視化できるものではなく、ここにこのように存在するといった明示的な形で示すことはできない。それでは、精神の病を「診断」とするというのはどういうことであろうか？ 一般的には、患者の経験している精神現象を正確に把握し、症状として記述することがその第一歩となる。一方、ベテランの精神科医なら、診断をすることの難しさをよくご存知のことと思う。

それでは、そもそもなぜ、私たちはこのとっつきにくい精神疾患を診断しようとするのであろうか？ 精神疾患が、すべての患者と共通の特徴やその患者固有の特徴のみで構成されているのであれば、診断をする意味はなく、あるいは不可能である。しかし、一部の患者とは共通だが他とは異なる特徴が存在し、特徴的な単位として認識することができるのであればどうであろうか？ これが、そもそも疾病分類と言われるものであり、これら単位に固有の名称を与えたものがいわゆる診断である。このような作業を行って、初めて精神疾患を共通言語として語ることができるようになるのであり、DSM もその一例にすぎない。一方、この共通言語が存在しなければ、私たちは自身の経験から学ぶこともできなければ、共通の土俵で疾患について語ることもでき

ず、それ故、精神医療をよいものに深化させることができない。

2013 年 5 月に 19 年ぶりに DSM-5 が刊行され、翌 2014 年 6 月に日本語版が上梓された。さまざまな批判もある中、大著である DSM-5 を手に取っている方も少なくないであろう。私は大学に籍があり、普段から若手医師のトレーニングに当たっているが、そこで最も苦勞する点の 1 つが DSM の「正しい使い方」を伝えることである。ややもすると、症状を並べてみてどれに一番近いかといった表層的な作業にもなりかねない。加えて、治療に際しては、この DSM 診断のみでは不十分であり、この共通言語を出発点として、患者固有の特徴を評価し、診断を定式化したうえで個別的に行う必要がある。また、治療のエビデンスに関しては当然 DSM-IV-TR までに蓄積されたものであるから、目の前にいる患者さんの診断、治療のためにも、しばらくは DSM-IV-TR と DSM-5 の共通点と差異をよく理解しておくことは極めて重要である。

前置きが長くなったが、本書の内容を紹介したい。第 1 章が DSM-5 に至るまでの歴史や変遷、第 2 章は DSM-IV-TR からの主要な変更点、第 3～19 章までは DSM-5 の診断基準の骨子、そして第 20 章以降には評価尺度、

パーソナリティ障害のモデル、今後の研究のための病態（例：減弱精神病症候群など）が簡潔に記されており、現時点における精神医学の操作的診断基準の入門書としてエッセンスを凝縮した内容となっている。DSM-5 が刊行されて以降、多くの医学関連雑誌がその特徴を診断別に特集号で扱っているが、本書にはこれらの内容も系統のかつコンパクトにまとめられており大変読みやすい。診断基準の概要を知りたいとき、DSM 診断の歴史的な変遷を知りたいとき、DSM-IV-TR と DSM-5 との異同について知りたいとき、まず手に取っていただきたい 1 冊である。私はカンファレンスの際には、本書と DSM-5 の双方を机に置き、まず本書を眺め、必要に応じて DSM-5 を調べるようにして大変重宝している。

最後に、待たれていた本書を送りだして下さった獨協医科大学精神神経医学講座の下田和孝教授はじめ諸先生方に感謝したい。



B5・頁 464 2016 年 6 月
 定価：本体 9,000 円＋税
 [ISBN978-4-260-02486-0]
 医学書院刊